

## EWC 留学生としての体験を回顧して

梅沢時子

(留学年次 1965－1966)

本会誌 *The Fulbrighter in Chubu* の第15号に私はフルブライターとしての体験(1968－1970)を寄稿していますので、今回は、フルブライターとしての留学を志望する契機と基礎力を与えてくれた、それ以前の EWC 留学生(1965－1966)としての体験について書こうと思います。

EWC での私の履修課程は TIP プログラムでした。それは、つまり、**Teacher Interchange Program** と言いまして、アメリカ各地の社会科高校教員やアジア諸国の英語科高校教員を対象にし、1年と2ヶ月に亘って受講するものでした。アメリカからの留学生は、アジア研究などの単位履修をし、一方、日本を含めたアジア諸国の留学生は **TESOL** つまり **Teaching English as a Second Language** (第2言語としての英語の教育)や、アメリカ研究の単位履修をすることが予定されています。私たちアジアの留学生は、ハワイ大学でⅠ学期とⅡ学期を過ごし、そして、夏期はフィールドワークとして、米本土ワシントンDCのジョージタウン大学で受講をし、加えて、アメリカ一周の旅を経験できるものでした。ホノルル市に滞在中は、アメリカの TIP 員との合同の会合を持ったり、一緒にハワイの島々を旅行したりする企画がありました。また、ホノルル市所在の高校のアジア研究の授業に出向き、学生の質問に応じたりする一種の奉仕活動もいたしました。ハワイを離れてから、アメリカ人 TIP 員はアジア諸国の、私のアメリカ人ルームメートの知らせに依りますと(日本滞在4週間に続いて、韓国、中国の香港——当時は未だ英国植民地、ちなみに返還は1997年7月——、さらに台湾、タイ国、インド、エジプト、ヨルダン、イスラエル、イスタンブール、アテネなど)旅行の途についたようです。そのように、単位履修をするが、学位取得を目指さないプログラムでした。

さて、私が EWC の留学に発ちました1965年という年は、前年1964年になってやっと日本では海外旅行が解禁された時です。そして、円の固定相場が1ドル360円の時でしたから、私の周囲には海外旅行の経験者は少なく、海外は実体感がないお伽話の国のようでした。私自身にとりまして初体験のことでしたから、これから載せます経験も素朴な印象

の記録にすぎません。

私たち日本人 TIP 留学生は、横浜港から **President Wilson** 号に乗り出航いたしました。栈橋に立ち私たちを見送る人たちの手と甲板に立つ私たちの手の間につながる紙テープが揺れ、次第に船が遠ざかるとき、テープが張り詰め切れてしまうまで、感傷に浸りました。

船の中で、すぐオリエンテーションが始まりました。説明は英語でなされ、この時点で、もう英語の世界に入りました。私がつまずいた最初の英単語が **cockroach** であったことを今でも思い出されます。オリエンテーションのスタッフの方が、「アジアの人は寮内に **dried fish** を持ち込んだりしますので **cockroach** が出てきます。そうしないで欲しいです」と注意されたとき私は「それはどのような生物ですか」とお聞きしましたら、その方は、さらに懇切丁寧に手真似を加え説明をされたのですが、今まで私の学生時代に語学練習として広く読みあさった文学作品の中にも出て来なかったような単語であり、どうもその正体の核心を掴めませんでしたので、ついに「それを私は知らないのですが、日本にいるものでしょうか」との愚問を發したのです。（ちなみに **cockroach** はゴキブリでした）

かようにして、私たちを乗せたプレジデント・ウイルソン号は、船内には水泳プールが備えてある堅牢豪華な船でしたが、太平洋の真ん中に来ましたとき、上下に大変揺れましたため、船酔いで吐き気を催した留学生は殆どだったと言ってよろしいでしょう。晴天であり風も吹いていませんでしたのに、多分海流のうねりのせいだったのでしょうか。太平洋を渡ることの厳しさを実感しました。その時から3年前の1962年に堀江謙一氏がヨットで太平洋横断の独り旅を成就されたと聞いていましたから、その果敢さが肌で理解できました。

1週間の航海ののち私たちの船が着いたのは、なんと、真珠湾 **Pearl Harbor** でした。ここが1941年に日本軍が奇襲した、そして日米が対峙する第二次世界大戦の悲劇の発端となった港であるのかと認識し、感慨深くしたことを記憶しています。

とは言え、そこは、他方、私にとってまだ、外国というお伽話の国でもありましたが、そこへ到着し、ハワイの方たちが民俗衣裳のムームーを着て美しい花の首輪を垂らし私たちを出迎えてくださったとき、そして。私たち一人一人の首にも清楚な白色のプルメリアの花輪を掛けてくださっ

たときは、やはり、お伽の国に招かれたような錯覚に陥りました。

それから、大地に足を踏み入れまして、ああ外国の地面も日本の地面と同じ触感であると知り、そして、空を見上げましたら、ああ空も日本で見てきた空と同じようだと知り、なるほど、外国と言ってもどれも地球の表面の地殻に立っているのだと判り、現実感に戻り、地球上人間として一種の連帯を感じました。その数年前の1960年にソ連のガガーリン氏が初めて宇宙から地球を眺め、「地球は青かった」と驚嘆されたのとは次元が違いますが、私自身の素朴な認識の感動を思い出します。

それから、私たち留学生一行は、EWC 本部に案内されまして、前庭の芝生を眺めましたとき、そこに設置されている何十もの撒水機 **sprinkler** の一つ一つに小さな虹が架かっていて競演しているさまに驚きました。私はその時まで、空高くに架かる虹の自然現象しか知りませんでした。なんと、この風景は EWC の構想の「東と西の架け橋」を唄うにふさわしいと私は解釈しました。また、EWC に造園されていた日本庭園の橋が丸いデザインの橋桁に造られていましたから、これも、「架け橋」の象徴を表現しているようで、似合うデザインだと思いました。

ところで、EWC の機関誌は、常に属称のように“**help build Asia-Pacific community**” の語句を添えていますことから、EWC は環太平洋・アジアの共同体建設を目指していることが理解できます。その視野で見ましたとき敷地内の **Kennedy Theatre** は、多分 **J.F.Kennedy** 大統領（1961－1963）が力説したニュー・フロンティア政策の一環として創設された EWC 制度の記念の建物なのだろうと私は想像しました。当大統領が2年前にテキサス州ダラスで暗殺された事件と、並びに、氏が積極的に推進しようとした環太平洋・アジア地域への外交的構想とが私の心中で交錯しました。

さて、日本人 TIP 員6人のうち女性は私1人でしたが、いや実は、も1人いましたが、沖縄出身で、彼女だけが胸の名前カードに「**Japan**」ではなく「**Okinawa**」と書かれてありましたことに、未返還の沖縄を意識させられました。（ちなみに沖縄返還は1972年に実現されました）私たちは「**Hale Kuahine** ハレクアヒネ」という爽やかな語感のポリネシア語の名前の女子寮に案内され、ハワイの異国情緒を感じ、ハワイの歴史に初めて触れることになりました。寮内では、アメリカの TIP 員である **Marilyn**

が私の **roommate** として紹介されました。彼女は **Wisconsin** 出身で、それから2学期間、つまり、翌年の春まで、仲良く楽しく過ごせました。今でも交流が続いています。日本人同士でも同室で暮らす機会は少ないわけですが、二つのベッドがある一つ部屋の中で毎日暮らすのですから、私としてはお伽噺の国の人間の総体を知るような、そして、全く英語の世界に入れさせられた状態でした。そして、次第に英語を通して生活するアメリカの文化を体験し、彼女から知識上もアメリカ文化を多く学んだと思います。

キャンパスではアメリカ諸地方からのアメリカ人や、アジア諸国からのアジア人に私は初めて接し談話することができました。実に国際色豊かなキャンパスだと思いました。そして、アメリカ人も諸地方出身により地方特有の訛りのある英語を話しますし、アジアの各国の人たちは、また、それぞれの国特有の訛りのある英語を話しているのを知りました。私は英語教師として、そのように雑多な英語がありながら、英語という言語で世界の人々と意志疎通が可能であることを知りました。

つぎに、私たちが履修した専攻科目について感想を述べましょう。私たちはハワイ大学とワシントン DC 所在のジョージタウン大学で新言語学に基づいた英語学を履修しましたが、そこで **phoneme** (音素) **phonetics** (音素学) の概念を得ましたことは大いなる刺戟でした。それまで私は伝統的学問の **phonetics** (音声学) に終始していましたから、この **phoneme** の概念を基本にして言語の音声を分析することは広い範囲で合理的であると認識しました。この概念で他の言語も開拓しやすいのではないかとも思えました。履修した講義を通じ、アメリカでは構造言語学、はたまた、生成文法も開発されていることを知り、その導入を受けましたが、そこでは従来の伝統文法とは視点を異にし、概してコミュニケーションを視点として言語学のパラダイムの再編成が行なわれていることを知りました。そして、そのことが言語研究を活性化させていることを感じました。こうした取り組みが研究の世界を駆動するのだなという力学をも感じたわけです。

一方、私自身の英語力に実益を与えてくれましたのが、基礎の講座の **paragraph writing**

でした。それは、論理的に文章の段落を構成し論文作成に至らせる添削指導でした。今まで何処においても受けたことのない講座でしたので、この

練習をさせていただいたことが私に論文作成の基礎的自信を与えてくれました。帰国後、私の学生に指導したいと思った科目でした。一方、私が既に学部時代に専攻した英米文学の知識を活用し修士号取得のための英文の論文作成を体験したいとの発想と意欲が出てきたのです。フルブライターとして、次の留学により、この希望が可能になりました。

ハワイでの2学期間を終了し、私たちアジアの TIP 一行は米本土一周旅行をさせていただき、——詳細を述べるには頁数の余裕がありません——アメリカの自然の巨大な造形に驚き、現代の文化の諸施設の壮大さに感嘆し、多様な民俗習慣の存在を知り、歴史や文化を概観できましたことは、大変楽しい、かつ、有益な旅でした。そして、途中に出会った人々の多くが、あたかもケネディ大統領が国民に問うた言葉——国民が国にたいし何ができるかを考えて欲しい——に答えているかのように私たちに親切に対応してくださり、その方たちが、国の文化の前途を意識し自ら外交官的姿勢を発揮されているように思えました。この人間風景もアメリカ文化の活性的一面だと感じました。

私自身は次のフルブライト留学の恩恵も受けましたが、この留学制度の立案者でありましたフルブライト氏がメッセージとして私たち留学生に寄せてくださっている、氏の胸中にあった言葉を考えますと——要約して「国際教育を通じて素晴らしい、そして稀な能力である **empathy** を開発する必要があります。それとは、自分を含めた世界を客観的に見ることができ、相手の立場になって感じる能力のことです」(We must seek through international education to develop empathy--that rare and wonderful ability to perceive the world including ourselves as others see it) ——氏の胸中には、このような普遍的に必要とされる人間像が描かれていたことに敬意を感じ共鳴せざるをえません。このような人間像こそ、話し合える人間、コミュニケーション可能な人間、外交が成り立つための人間像の標石であると思います。そして、この人間的教養があってこそ民主主義が機能すると思うのです。

往事を回顧し私が受けた恩恵に感謝しますとともに、留学制度の実現に貢献された優れた個性の方々にも想いを馳せ、広い視野に立つことが出来る知性と感性が備わった普遍的な人間像に自分も近づくよう努力し、かつ、周囲の青年たちをも育てることが大切だと思う次第です。